



2018.03.16 版

一般社団法人 天体望遠鏡博物館



住 所 : 香川県さぬき市^{たわすけみつひがし}多和助光 東 3 0 番地 1
(旧さぬき市立多和小学校)
ホームページ : <http://telescope-museum.com/>

ご挨拶

一般社団法人

天体望遠鏡博物館代表理事

村山昇作

理由はともかく日本経済の高度成長は終わりを告げ、至る所に高度成長時代のつけが回ってきたように思われます。たとえば、少子高齢化、人口の減少、過疎地の問題、公共施設の予算不足などです。今後日本経済が昔日の勢いを取り戻せばいいのですが、過去20年を振り返ると、こうした低成長の時代がまだ続くとの前提のもとで、いろいろな施策を講じておくことも現実論としては必要ではないでしょうか。

たとえば、高度成長時代に建設された多くの公共天文台は、少子高齢化や市町村合併、さらには予算不足などで、閉鎖されつつあります。この結果、貴重な天体望遠鏡が廃棄される運命にあるほか、子供たちが、天文学のようなマイナーな学問を学ぶ機会も減っているのが実情です。私たちは、こうした問題をすべて国にあずける発

想から脱して、民間で出来ることは民間で解決しようと思っています。

私たちは、主に公共施設で不要になった大型天体望遠鏡を譲り受けて修復し、これらを次世代に残そうとしています。また、これらを使って子供たちに科学の面白さ、素晴らしさを知ってもらおうとしています。すなわち、天体望遠鏡のリユースというかたちを取った高度成長期の投資の後始末です。

次に、天体望遠鏡博物館の立地場所ですが、人口減少が著しい中山間地域の廃校になった小学校を使わせていただいています。これもかつての公共投資のリユースです。そして、こうした活動を通じて、過疎地域振興のモデルになりたいと思っています。すなわち、既存施設を再利用したかたちの地域振興策です。

そして、最後に天体望遠鏡博物館では、地域のお年寄りが活躍できる場を提供したいと考えています。こうした活動を通じてお年寄りに元気になっていただければ、これこそ高度成長から低成長型経済への軟着陸となり、高度成長経済のつけを取り戻すことにつながると思います。

そのためには、収集した膨大な数の貴重な天体望遠鏡を修復する

必要があります。今こそ、民間企業そして皆さんおひとりおひとり
のご協力が必要です。協賛会員にご入会いただきたく、よろしくお
願い申し上げます。

これまでの経緯

(一社)天体望遠鏡博物館は代表理事の村山が2001年に東京から四国に移り住んだことから始まります。村山はすでに八ヶ岳に個人天文台を有していたのですが、香川県にも天体観測所を作りたいと思い土地探しや天体望遠鏡の候補探しを始めました。その過程で多くの公共天文台が少子高齢化や市町村合併で閉鎖される運命にあることを知りました。こうした天文台にある天体望遠鏡は何トンもある立派なものが多いだけに個人では引き取り手がなく、ほとんどは建物とともに廃棄される運命にあるのです。なかには歴史的にみても保存されてしかるべきものも多くとても残念なことです。

そこで、単なる天体観測所を作るよりも、天体望遠鏡博物館を作り行き場のない天体望遠鏡を引取ることにし、2007年頃から「天体望遠鏡を文化遺産として残す会」の名称で活動してきました。おかげさまで多くの天文台関係者や地方公共団体の方、それにボラティアの方のご協力で、多くの望遠鏡が集まりました。そこで2010年10月に一般社団法人「天体望遠鏡博物館」として再出発しました。

その後天体望遠鏡の候補地を探して四国中を走り回った末出会ったのが旧多和小学校です。多和小学校は児童数が激減したところから平成24年3月に閉校となりました。四国八十八か所のお遍路沿いにあり、近くには八十八か所の最後のお寺、結願の大窪寺があります。お遍路さんのように四国中を巡った後、たどり着いたのが結願寺というのは何かご縁を感じます。

この地を選んだのは、天体観測に適しているということもありましたが、何ととっても「結願の里 多和の会」を中心とした地元の皆さんの熱意と心温まる歓迎です。そしてこうした地元の熱い思いを受け止めてご協力いただいた、さぬき市はじめ行政に携わる皆さんの行動力がなければとても実現できませんでした。

おかげさまで2016年度3月には部分開館し、翌2017年度に全面開館を実現できました。現在は収集した天体望遠鏡の修理・展示・天体観望会・天文教育等の諸活動を行うとともに、まだ全国各地に残っている貴重な天体望遠鏡の引き取り活動も継続しています。むしろ開館後、当館の社会的価値を認めて下さる自治体・天文施設が増え、「天体望遠鏡の救出依頼」が増加しています。この期待に応えられるよう努力して参ります。

天体望遠鏡博物館の目指すもの

①貴重な天体望遠鏡の保存、展示

天体望遠鏡そのものと天体望遠鏡を巡る文化を次世代に引き継ぎます。

②科学少年、少女の育成

自然科学に対する関心を喚起し、科学の発展と文化の振興に寄与します。特に少年・少女に、大型天体望遠鏡に間近に触れられる機会を提供することにより、科学少年・少女の育成に寄与します。

③集落の活性化

人口の減少が進む中山間地域の振興に寄与します。



特産品直売所



直売所オープン時の様子

☆天体望遠鏡博物館が開館する予定の旧多和小学校では、地域活性化団体「結願^{けちがん}の里^{さと} 多和^{たわ}の会^{かい}」の皆さんにより運営される特産品直売所が、2013年11月にオープン。特区の認定を受けて製造されるどぶろくや地元の農産物などが販売されています。

オンリーワンの天体望遠鏡博物館

1. 世界初の「星で望遠鏡を楽しむ」コンセプトの博物館

今回整備を進めている天体望遠鏡博物館の主役は「天体望遠鏡」です。天文台施設内に天体望遠鏡を展示する例や江戸時代の歴史的な望遠鏡を展示している例はこれまでもありますが、いずれも天体望遠鏡が主役ではありません。

天文台が「望遠鏡で星を楽しむ」施設とすれば、当博物館は「星で望遠鏡を楽しむ」施設です。このようなコンセプトで作られた天体望遠鏡博物館は、我々が知る限り世界初と言えます。

2. こんなことができます

天体望遠鏡の見え味の違いを実際に星を見て体感できます。たとえば、数十年前の望遠鏡と最新の望遠鏡の見え方を比較することにより、当時の技術と最新技術の違いを実感できます。意外に昔の望遠鏡の性能の高さに驚かされるかも知れません。また、昭和40年代当時の望遠鏡同士を比較することにより、メーカーによる見え方の違いを確認できます。また名もないメーカーの望遠鏡の中に、あまり知られていない高性能の望遠鏡を発見できるかも知れません。

以前はレンズ磨きの名人と言われる方がいて、手作りで望遠鏡を製作されていました。なかには幻のレンズや反射鏡と言われるものもあります。こうしたレアなものもコレクションの中にありますので、実際に見え味を確かめることができます。果たして名人芸が現代でも通用するのか、興味があるところですよ。

また、天体望遠鏡には屈折式をはじめ、反射式などいろいろなタイプがあります。こうしたタイプ別の見え方の違いも比較できます。



3. サイエンスで過疎化する集落を盛り上げよう！

天体望遠鏡博物館が立地予定の多和地区は、高松市内から車で40～50分の比較的「便利な」中山間地域にあります。

多和地区の住民で組織される「結願の里 多和の会」と連携し、「サイエンスで過疎化する集落を盛り上げよう」を合言葉に、集落活性化にも取り組みます。

4. 都会の人たちに第2の故郷を提供

当博物館が核となり、星を通じて都会に住む方との交流の輪を広げ、ここ多和を第2の故郷として楽しんでいただけるよう努めます。

5. 多和地区はこんなところ

近隣に四国88ヶ所^{けちがんじ}結願寺の^{おおくぼじ}大窪寺があり、年間40万人と言われる巡礼者・観光客が訪れています。



☆天体観望には夜空が暗いことが基本条件になります。中山間地域である多和地区は天体観望に適した暗い空があり、こうしたニーズにぴったりです。

旧多和小学校から南の空を望む



6. 天体望遠鏡も建物もすべて再利用

(一社)天体望遠鏡博物館の所有する中・大型天体望遠鏡は主として閉鎖天文施設から競争入札で購入したものや寄贈していただいたものです。そのような望遠鏡の多くは、当時の最先端の光学技術が注ぎ込まれた優秀なもので、高価な物では数千万円の費用をかけて製造されています。こうした貴重なものであるにもかかわらず、他に応札者は現れません。なぜなら、個人として所有するには、あまりにも大きく、重く、設置場所に困るだけでなく、移設、修繕にも多額の費用がかかるためです。私たちは活用されていない望遠鏡そのものを、移設、修繕し再利用するだけでなく、展示施設も廃校を利用するなど、徹底した再利用を図っていきます。



7. ボランティアを活用

多くの天文施設は、運営に必要な人材と人件費の確保に苦勞しています。当博物館は（一社）天体望遠鏡博物館会員の無償奉仕により、寄贈望遠鏡の受け取りと保管を行っています。

会員の多くは当社団の設立以前から、個人あるいは各種天文団体で天文普及に取り組んでいる人たちです。みんな三度の飯より天体望遠鏡の方が好きな人たちです。会員はただ無償で作業をするのではなく、会費を払って負担の大きい作業を行っています。つまり、当社団では、会費を払うことで初めて作業をさせてもらえるのです！このような熱心な会員により当社団は運営されています。

また、会員だけでなく、県内外のアマチュア天文家有志にも協力していただいているほか、香川県内の企業からもご協力いただいています。



8. 観測会、教育・啓発活動

広く青少年から一般社会人までを対象に、天体望遠鏡を活用した天文普及活動を行うことにより、科学と文化の振興に寄与します。これには天体望遠鏡の操作実習や夜間観測等、体験学習や実習活動も含まれます。例えば、小・中・高校の教職員の皆様の教材研究や実地研修の場として、また児童・生徒、科学部の天文実習、校外学習にも活用していただけます。



9. 天体望遠鏡がもたらす出会い（1）

収集した天体望遠鏡を使える状態で展示するためには、修復とメンテナンスが必要です。その柱は(有)ヨシカワ光器研究所の吉川社長です。同社は熊本にあったのですが、吉川社長が当社団の倉庫を見学された際、その趣旨に賛同いただき、「これらの望遠鏡を自らの手で修復したい」と決断。1年後には会社ごと熊本県から香川県に移ってこられたのです。2012年の2月のことです。



吉川社長



旧多和小学校プール棟にて

10. 天体望遠鏡がもたらす出会い（2）

当博物館へ展示予定の目玉収集物の一つが(株)日本精光研究所という会社が作った口径16センチの屈折望遠鏡（ユニットロン）です。この望遠鏡は存在が確認されているのは4台のみであるところから、マニアの間では「幻の望遠鏡」と言われていたもので、長い間、実際に見た人はいませんでした。このうち、1台を当社団理事長である村山氏が偶然、東京の望遠鏡ショップで見つけ手に入れました。それだけでもたいへんな出会いでしたが、その数年後、もう1台を吉川社長が福岡の古物商で見つけ、4台のうち2台を当博物館が所有することになったのです。そして修復のために、その1台の分厚く塗られた塗料をはがしたところ、「四国天文台」の刻印が現れ、徳島市の眉山（びざん）に昔あった天文台で使用されていた天体望遠鏡であることが判明しました。



1 1. 多和を世界の天文愛好者の聖地に

天体望遠鏡の収集はこれからも続きます。これらを活用して、ハイアマチュアから児童まで誰もが楽しめる博物館を目指します。世界に例がないだけに、世界中から愛好家が訪れることが期待されます。こうしたことを通じて、さぬき市多和を世界の天体望遠鏡の聖地にしたいと思います。

1 2. どんな天体望遠鏡があるのか

- ・ 法月技研 62 cm 反射望遠鏡
- ・ 日本光学工業(株) 11 cm 屈折望遠鏡 (S8 年)
- ・ (株)五藤光学研究所 1 インチ 屈折望遠鏡 (S2 年)
- ・ (株)五藤光学研究所 25 cm 屈折望遠鏡
- ・ (株)日本精光研究所 6 インチ 屈折望遠鏡
- ・ 西村製作所 15 cm 屈折望遠鏡 (S4 国内初 15cm)
- ・ 西村製作所 木辺鏡 15 cm 屈折望遠鏡
- ・ 西村製作所 40 cm カセ/ニュートン切替式 反射望遠鏡
- ・ ブラッシャー 25 cm 反射望遠鏡
- ・ 中村要、木辺、苗村氏 研磨反射鏡、望遠鏡 多数
- ・ 日本光学 (Nikon)、五藤光学研究所、西村製作所、旭光学 (PENTAX) 他 15 cm / 20 cm 屈折望遠鏡 多数。



13. 皆さんのサポートを必要としています

～会員募集のご案内～

これまで天体望遠鏡の収集は、クレーン会社、建設会社、輸送会社等のご援助をいただきながら、会員の勤労奉仕と寄付によって行われてきました。立地につきましても、さぬき市をはじめ「結願の里 多和の会」を中心とした地元の皆さんからの熱いご支援のもと、旧多和小学校校舎を天体望遠鏡博物館として使用できる施設として整備いただきました。

ここで問題となるのが天体望遠鏡の整備費です。整備費は開館準備段階だけではなく、今後継続して必要となります。これら整備費以外にも、施設の維持経費も必要です。博物館の性格上、入場料収入には限りがあります。

そこで、個人、法人を問わず天体望遠鏡博物館の会員となっただき、その会費収入とご寄附によって、当博物館を運営できればと思っております。是非とも皆様のご理解とご協力をお願いいたします。



募集会員

(1) 個人会員

- 正会員 年間会費：15,000円
 賛助会員 年間会費：1口1,000円で5口以上
 学生会員 年間会費：無料

(2) 法人賛助会員

①ダイヤモンド会員 年間会費：500万円以上

- ☆当博物館の名称の一部に企業名等を入れることが可能です。
 ☆博物館において年に数回、企業名でイベントを開けます。
 ☆目玉となる望遠鏡に企業ロゴを入れ、「この天体望遠鏡は〇〇社のご寄付により、維持されています」と表示させていただきます。

②エメラルド会員 年間会費：100万円

- ☆各展示ルームの命名権が与えられます。
 ☆博物館において年に1回企業名でイベントを開けます。
 ☆目玉となる望遠鏡に企業ロゴを入れ、「この天体望遠鏡は〇〇社のご寄付により、維持されています」と表示させていただきます。

③プラチナ会員 年間会費：50万円

④ゴールド会員 年間会費：20万円

⑤シルバー会員 年間会費：10万円

会員の種類	ダイヤモンド	エメラルド	プラチナ	ゴールド	シルバー
年間会費	500万円	100万円	50万円	20万円	10万円
主 な 特 典	望遠鏡命名権*	○			
	望遠鏡命名権	○	○		
	自社イベント開催	○	○		
	自社製品の展示	○	○	○	
	ユニフォームロゴ	○	○	○	
	入口に企業ロゴ	○	○	○	○
	代表者の特別招待	○	○	○	○

・ユニフォームのロゴは会員の種類により大きさが変わります。

・自社イベントについては、ダイヤモンド会員は年に1回、エメラルド会員は3年に1回とさせていただきます。

一般社団法人 天体望遠鏡博物館

代表理事 : 村山昇作

理事 : 今井龍二、漆原利昭、岡村和彦、梶原彰洋
片山敏彦、白川博樹、成行 清、堀川利裕

監事 : 稲毛清和

定款（抜粋）

（目的）

第3条 当法人は、主として歴史的価値のある天体望遠鏡を収集・展示・活用することにより自然科学に対する関心を喚起し、科学の発展と文化の振興に寄与するとともに、天体望遠鏡そのものと天体望遠鏡文化を次世代に引き継ぐ事を目的とする。その目的に資するため、次の事業を行う。

- ① 天体望遠鏡の収集
- ② 天体望遠鏡に関する資料の収集
- ③ 上記の保存・修復・展示
- ④ 上記を活用した教育・啓発活動
- ⑤ その他、当法人の目的を達成するために必要な事業

連絡先

メールアドレス mail@telescope-museum.com

ホームページ <http://telescope-museum.com/>

さぬき市に望遠鏡博物館

香川県さぬき市の中山間地、多和地区の廃校に「天体望遠鏡博物館」が2015年オープンする。様々な種類の天体望遠鏡を展示し、観望もできる施設は世界的にも珍しい。天文観測の聖地作りに科学少年・少女の育成、さらには過疎地の活性化。様々な思いを乗せた構想が動き出す。

香川県東讃地区にある倉庫。月に何度か天体望遠鏡が運び込まれる。望遠鏡事業から撤退した大手光学機器メーカーからは展示用の見本品、天体望遠鏡メーカー、西村製作所（京都市）からは社内に眠っていた年代物の

天文観測の聖地に育て

望遠鏡など。知り合いから引き取ったが、置き場所に困っていたという個人からの寄贈もある。

倉庫にはこうした天体望遠鏡が既に約150台あり、再来年の博物館開館を待つ。今秋には総重量5トンの大型望遠鏡を引き取る計画で、これは博物館ができる旧多和小学校の屋内プール跡に直接運び込む予定だ。そのため、同プールの改修工事を近く始める。

財政難で競売に

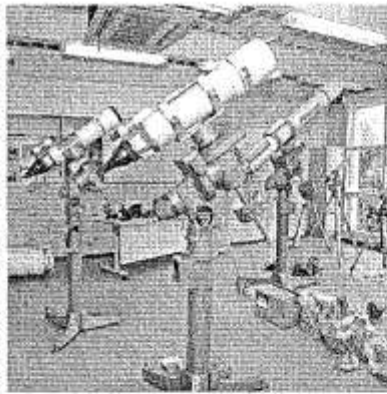
博物館構想を打ち出したのは元日銀高松支店長。現在、現在は百十四銀行顧問や京都大が設立した

「iPSアカデミアジャパン」社長を務める村山昇作さん。天体望遠鏡が趣味の村山さんは自ら使う中古の望遠鏡を探すため、十数年前から各地の自治体で競売にかけられる望遠鏡を見に行き始めた。

財政難で廃止された公設の観測施設や学校の統合など不要になった望遠鏡が競売にかけられる。だが大型の観望台、運

地宝創造

地元再生の星、期待高まる



寄贈された約150台の天体望遠鏡が出荷を待つ

び出しや輸送に費用がかかるため、入札者がほとんどいないことを知った。引き取り先がなければ廃棄処分だ。「古い望遠鏡は貴重な文化財。なんとか保存しなければ」と、天文観測の聖地を作る場所を求めて四国各地をめぐり、多和にたどり着いた。同地区は四国最大規模の遍路道沿いにあり、全讃場への巡礼を導き、地域産の農産物などを生かしたレストランを敷地内にオープンさせる計画を練る。同会の顧問旭会長は「過疎・高齢化が進む地区を元気にし、約半年で約50台が加わった。村山さんは「最少でもかなえられたい」と期待する。

自治体の財政難やハコモノ行政の失敗、少子化による学校の統合など、地方が抱える「負の遺産」が生み出した、行き場のない望遠鏡。それを地域再生の資源に変えようという試み。博物館構想に過疎地の望遠鏡から見る「新しい星」は、過疎地活性化と関係者の奮闘が続く。

（高松支店長 岩沢健）

あり、全讃場への巡礼を導き、地域産の農産物などを生かしたレストランを敷地内にオープンさせる計画を練る。同会の顧問旭会長は「過疎・高齢化が進む地区を元気にし、約半年で約50台が加わった。村山さんは「最少でもかなえられたい」と期待する。

自治体の財政難やハコモノ行政の失敗、少子化による学校の統合など、地方が抱える「負の遺産」が生み出した、行き場のない望遠鏡。それを地域再生の資源に変えようという試み。博物館構想に過疎地の望遠鏡から見る「新しい星」は、過疎地活性化と関係者の奮闘が続く。

（高松支店長 岩沢健）